

## その瞳の奥に輝く生命の奇跡 —ベトちゃんとドクちゃんと共に歩んだ人々—

藤本 文朗\*、遠藤 久仁子\*\*

### 要約

本学が、本学設立の主旨の中で、国際交流について述べ、2003年から本学の学生、教員がベトナムと交流、ベトとドクの介護保障、ベトナムの介護保障や障害者教育など10年間にわたる交流〔創発：本学紀要〕で、特別号など発刊〔日本語とベトナム語〕してきた。これらに関わって、上記テーマで2019年10月より2020年2月まで、京都を中心に朗読、語り公演を行うこととなり、その台本、写真などをまとめたものである。

キーワード：ベトナム戦争、ベトちゃんドクちゃん日本の支援、生命の奇跡

2019年9月27日受理（資料）

### 藤本文朗先生朗読台本

藤本文朗 「ベトちゃんドクちゃんの発達を願う会」代表 現在83歳 ベトナム、ホーチミン市のツーザー病院は、熱帯性の名も知らない白や赤の花が一年中咲く、美しい病院である。しかしこの病院には、アメリカが侵略戦争の中で使用した枯葉剤によって癌にかかった妊産婦などの産婦人科の患者が、800人近く入院している。80年代以降、同病院では、二日に一人の割合で「奇形」児が生まれていた時期があった。今もなお相当数の先天性の障害を持つ子供が生まれている。

私は、1985年1月より約3ヶ月間、文部省の短期在外研究員として、ベトナムでの障害者の実態、とりわけベトナム戦争との関係について知るため、ベトナムを訪れていた。

2月28日の朝、私はツーザー病院の二階でベトちゃん、ドクちゃんにあった。看護師さんと共に二人は、ワゴン車に乗せられて病棟の廊下を移動してきた。私が日本から用意してきたパンダのおもちゃを渡すと二人は取り合い、ポラロイドカメラで写した

写真を渡すと二人で奪い合い、カメラを渡すと二人でねじを回す。身体の不自由をカバーするにあまりある活動力。そして、ワゴン車を利用して、何とか二人で協力して歩こうとする姿は、「奇形」を感じさせなかった。

「私は、この二人の為に何ができるだろうか」おもわず私の口をついて出たこの言葉を、通訳が主治医グエン・テイ・ゴック・フォン博士に伝えた。

「この子達に合った車椅子を日本の技術で作っていただけないでしょうか。」

「これまでも、日本の色んな人がベトちゃん、ドクちゃんに車椅子を送ってくれると約束してくれましたが、なかなか届かないのです。二人とも1日、1日大きくなりますし……。」私は、日本人として恥ずかしい思いをし、そして二人の美しい目を見て約束せざるを得なかった。

「できれば今年の10月1日から3日、日本で開かれる学会に行く時、車椅子と抗癌剤を援助していただければと思います」

フォン博士の依頼を、この時はそう深く思う事無

\*大阪健康福祉短期大学

連絡先：藤本 文朗

大阪健康福祉短期大学 名誉教授

\*\*二人だけの劇場 セザンヌ 主宰

く引き受けた私を固く決心させたのは、その日、ホテルに帰って交わした日本の商社マンとの会話であった。ベトちゃん、ドクちゃんの写真を見せると、彼らは「こんな子が生きていてもね……。かえって不幸だ……」と、露骨に嫌な顔をした。

私はこの時、率直に言って怒りを覚えた。ベトちゃん、ドクちゃんは生き発達してきた。ベトちゃん、ドクちゃんは見世物ではない。どんな障害があろうと、人間として生き、発達する権利をもっている。そのことを世界中の人々に理解してもらうためにも、ベトちゃん、ドクちゃんの発達を保障する車椅子を贈ろう。海を越えたこの贈り物は、世界中の障害者を励ます事にもなるだろうし、人類の連帯の証となるはずだ。時とともに、私の怒りは固い決意に変わっていった。

「実は困っているんだ。」

車椅子で生活する全国唯一の図書館司書である河原正実のところに、私が電話をかけたのは、「願う会」発足の二日前であった。

「ベトナムの結合双生児に、車椅子を贈る約束をしてきたのだが、誰も設計を引き受けてくれない。」

私の声は苛立っていた。私が2ヶ月にわたってベトナムの障害児教育を視察し、帰国したのが3月8日。文部省へのレポートの整理に追われながら、ベトとドクのための車椅子を作ってくれるところはないのかと訪ね歩いた。

まず大学。人間工学が人気を高め、人間の生活と高度技術を結びつける研究が盛んになっていた。しかし、答えはノー。どこの大学もほとんどこんな特製車椅子の研究などしていなかった。最新のロボットは金になっても、一人ひとりにあった車椅子は商業ベースに乗らないということだろうか。障害者のための木製工具や遊具を研究開発しているところにも尋ねてみたが

「実は、その話は2年前にも聞いたことがある。その時にも断わったのだが、実際にベト、ドクに会ってみないと、どんな形にすればよいのか……」と首を振るだけ。私は、障害者問題の専門家でありながら、特製の車椅子を作る事の難しさを初めて知った。フォン博士の来日予定はあと数ヶ月あまりしかない。

「先生、そりゃまた、無茶なことを引き受けたものだ。」

河原は軽口をたたきながら、ある障害者の事を思い浮かべていた。車椅子生活で元設計者であった山口光義。同じ三方町にある国立療養所福井病院で療養生活を送っていた山口のことを、河原は以前に新聞で読んで知っていた。

大手企業でエンジニアとして働いていた24歳の時、山口は登山中の事故で頸椎を損傷、両手が麻痺し両足の自由を失った。市販の車椅子は彼の状態に合わず使えなかったが、山口は持ち前のエンジニア魂を発揮して、自分の力で動かせる車椅子を設計・開発したのである。

私と河原は山口を訪ね、呼びかけた。

「このベトとドクの発達を保障するには、身体を支えるために使われている手を自由にしてやる必要があります、そのためには、二人が無理なく座れる車椅子が絶対必要なんだ。」特製車椅子をと懇願された山口は、難色を示した。対象となるベトとドクに合った事もないのだから当然だった。私が入念に記録してきたメモやスライドを参考に、「こんなイメージの車椅子だな」と思い浮かべはしたものの、あまりに時間が過ぎる。河原は、渋る山口に食いさがあった。

「今諦めたら、ベトナムに贈る車椅子はできない。」手も十分に動かない山口が、精密な設計図を描くには、どんな苦勞があるか、知らない河原ではない。同じ重度の障害者だ。「手はどのくらい使えるのかな」「脚力はあるのかな」——やがて山口は意を決したように、車椅子の設計に関する質問を私達に投げかけた。矢継ぎ早の問いと、それへの応答の後、私と、河原にとって待望の声が面会室に響いた。「なんとかやってみましょう。」設計図完成まで1ヶ月、設計図を製作所に渡してから実際に車椅子が完成するまで1ヶ月。フォン博士来日に間に合わせることでできるタイムスケジュールが決まった。

次は資金である。「募金を集めるしかない。」「なんぼかかるか分からんが募金が集まらんかったら自分たちで身銭を切ればいい。」「なにか、募金を呼びかける団体が必要だな。」「ベトちゃん、ドクちゃんの発達を願う会、と言うのはどうだい」大まかな計画が立てられた。居合わせたメンバー全員が、発起人

になり賛同人になることが確認された。否も応もない。スライドに写し出されたベトとドクの現実、それを伝える私の言葉は、全員の脳裏に焼きついてしまった。

こうして、1985年4月22日、国立療養所福井病院の一室で、「ベトちゃん、ドクちゃんの発達を願う会」が発足したのである。

### 河原正実さん朗読台本

ベトちゃんドクちゃんの発達を願う会 事務局長  
現在 72歳

いまなぜ、ベトナムの障害者、「日本の、この福井の私達の周りにも、障害者は沢山います。その人たちをさしおいて、今何故、ベトちゃんドクちゃんなのですか」私は、この質問に取り憑かれた。敦賀市の杉原厚子さんから提示された問題だ。杉原さんは36年間の教師生活中18年間特殊学級に身を置き、障害児の教育にその全てを捧げてきた。その後退職し、退職金をつぎ込んで自宅を改造。「杉原塾」と愛称される、お母さんと子供達の為の空間を持っている。「願う会」のメンバーも、この空間に頻繁に出入りする。自慢の自然食を御馳走になり、深夜まで語り合っ、そのまま泊めてもらう事もある。杉原さんは私達のいろんな運動の「母」のような人だった。

その母からの率直な疑問、杉原さんはふうっと息を吐き言葉を続けた。

「十八年間・・・、障害者への差別は、いつまで経っても無くなりませんでした。昔は、見世物小屋に入れられた事を思えば、教育も受けられるようになり、最近教室も立派になるなど進歩もしました。でも、日本の障害者はちゃんとされていて、ベトナムの障害者はそうじゃないと、いう訳ではないですよ。」 私は頭を抱えた。確かにその通りだ。いま、ベトとドクに車椅子を贈る事に夢中になるより、日本の障害者のための運動をこそ、やらなければいけないのじゃないか。私自身、その運動の中にあって発達してきたのだ。

「小児リュウマチ」四歳のとき私を襲った病気は、十二歳のとき、不治の病と宣告された。その間私は母に背負われて、全国各地の病院を転々とした。が、症状は悪化し、手足の筋肉は収縮し動かなくなって

きた。

「学校へいきたい・・・。」病院を転々として一度も行った事の無い学校へ行きたくかった。母に背負われ小学校六年生として、初めて行った学校。十三歳の春、勉強がおもしろくてしかたなかったから、一年間で、小学校の全教科をマスターしてしまい、「もっと勉強して自立したい」と、二十一歳まで福井県下の肢体不自由児施設に入園し、中学校は施設内分校、高校は通信教育で卒業しました。

大学にも行きたくかった。運転免許も取りたくかった。学び、働きたかった。自分で自分の生活を切り開きたかった。が、大学は諦めざるを得ませんでした。通信教育を受けていましたが、専門のスクーリングは車椅子では行けず断念しました。車を運転し色々な所に行きたかったが、上肢の動きが不十分だという理由で落とされました。

そんな時、「あれは72年6月10日です」当時、福井大学で教鞭をとっていた藤本文朗が私を訪ねてきました。「うさんくさい人が来た」というのが最初の印象でした。藤本は、障害者だからといって手加減せず、綺麗な言葉、美しい事でごまかさず、触れられたくない事にも、傷口にもどンドン踏み込んでくる。専門用語をどンドン使い、「なんだ、こんな事も知らんのか」と言う。向こうが手加減しないから、こっちも本気で怒っていく。で、いつの間にか向こうのペースになってしまう。異国の言葉でも聞くような障害者問題の用語。「知らんなら出て来い」「こんな身体では出ていけません」「迎えにくるから来い」

私には一人で閉じこもって、もやもやしていた日々を終焉を告げる時が来ました。一人で悩んでいた事が、障害者みんなに共通した悩みであるという事が良く分かりました。そして、その障害者を支える人達が沢山いるということも。全国障害者問題研究会との出会いは、私の世界を大きくひろげ、障害者のための街づくり運動、「障害者にも高等教育を」という運動、障害者の運転免許取得、障害者の就職を広げる運動全て、一人の力ではできないこと。この運動の中にあってこそ、自らの発達があるんだ。

そして私は、福井大学始まって以来の車椅子の聴講生になる事もできました。藤本の尽力によるものです。通学は、家から三方駅まで姉に送ってもらい、

座席に座ったまま 2 時間で福井駅へ。ボランティアに迎えられ、福井駅から車で福井大学へ。一夜藤本の研究室で寝て、翌日、同じ手順で自宅に帰る、という方法でした。こうして私は様々な運動を経て、図書館司書の資格を取り、日本で初めての車椅子の司書として三方町立図書館に勤めることになったのが 1980 年 4 月。三十一歳にしてやっと、九万円近い給金を手にし、六年かかり運転免許も手にしました。

自分を育ててくれた障害者運動。「人間が人間として大事にされるために」・・・それがこの運動だ。ところがどうだ。戦争は、もっと多くの障害者を生み出した。アメリカは催奇性を持つと知りながら、1961 年から 71 年までの十年間に渡ってベトナムに枯葉剤を撒き続けた。その結果ベトとドクが生まれた。こんな、人間の尊厳を踏みにじる行為が許されているのか。「ベトとドクに車椅子を贈る運動は、障害者運動の本流でもあるんだ、きっと、杉原さんも日本で障害を持つ人達も理解してくれるはずだ。」こうして私は、ベトとドクの運動の中に身を投じて行く事になりました。

「おじさん、ベトちゃん大丈夫か、ドクちゃんとの切り離し手術、いつするの、二人ともずっと日本におるんか。」図書館のカウンターにいても、本の貸し出しどころではありません。小学生や中学生が飛び込んできて質問攻めにあう。お年寄りの中には、「このたびは・・・さぞお心の痛みます事でしょうに・・・」と、深々と頭を下げてくださいる方もいる。まるでベトとドクが私の身内でもあるかのように。

ベトちゃんとドクちゃんが日本に来て、早一ヶ月が過ぎようとしている。二人はベトナムと日本医師団の細心の看護のもとで、3000 キロの旅に挑戦し、見事クリアした。この国と国家、思想と信条、そして過去のいまわしい戦争の加害者と被害者という関係乗り越えた快挙に多くの人々が拍手を送った。

また、藤本から初めてベトとドクのスライドを見せられた時、脈略は無いけれど、峠三吉の「にんげんをかえせ」が、私の中で甦って来た。

ちちをかえせ ははをかえせ  
としよりをかえせ  
こどもをかえせ

わたしをかえせ わたしにつながる  
にんげんをかえせ  
にんげんの にんげんのよのあるかぎり  
くずれぬへいわを  
へいわをかえせ

この詩は原爆詩集だから、ベトやドクと直接の因果関係は何もない。しかし「ベトちゃんドクちゃんの発達を願う会」の活動を進めて行くうちに、この詩の持つ深い意味に何度となく触れていく事になります。

ベトとドクの瞳は愛らしく、神秘的でさえある。だが、運動となれば別である。二人に「愛の車いす」を贈る事は生易しいことではない。山口光義が特製車いすの設計を不安ながらも引き受けたのと同時に、私達の「願う会」もまた、不安な足取りをたどることになる。「願う会」には組織も立派な運動論も無かった。毎日が試行錯誤の連続であり、壁に突き当たって悩み、悩みながら行動していった。運動を始めた頃は、色々な方から運動の理念について問いただされ、私は正直分かりませんでした。欧米の事については案外良く知っている私達も、こんなに身近な東南アジアの事になると全く無知でありましたので、ベトナム戦争や枯葉剤について、片っ端から書籍を集め、資料を蒐集し、専門家にアドバイスを求め何度も学習しました。そして、藤本は運動の柱に「国際連帯」と「人類愛」を置きました。初め私たち事務局員は反対しました。そんな難しいキャッチフレーズは、もう流行らないと・・・。

しかし、全国の皆さんが、この国際連帯と人類愛を理解して下さったのです。

2000 人あまりの方から 500 万円もの募金をいただきました。激励の手紙をいただきました。私達がベトナムへ出す手紙を一生懸命英訳してくれた友人もいます。こうして私達は、運動の中で平和と国際連帯、障害者と戦争、生命と人類愛を学んでゆきました。

また、ベトとドクはいろんなことを私達に教えてくれました。そのなかに ABC 兵器があります。人類が生み出した、悪魔の兵器です。A は原子兵器、B は生物学兵器、C は化学兵器、をそれぞれ指します。この ABC 兵器と日本は深い関係があり、A は広島・

長崎で人類史上初めて洗礼を受け、B については、森村誠一のベストセラー「悪魔の飽食」が明らかにしたように、日本軍の七三一部隊が中国で人体実験を行い、その資料は全てアメリカに渡されていると言われていました。C は日本が直接手を下さなかったとはいえ、沖縄の嘉手納基地からベトナムへ毎日のように戦闘機が飛んでいった。

枯葉剤、まぎれもない化学兵器です。この枯葉剤はジャングルを枯らせ、食糧を絶ち、多くの人たちを死に至らしめました。しかし枯葉剤が恐ろしいのはそれだけではなく、戦争が終わり、平和になったと思っても奇形児が産まれてくる。被爆から 40 年を隔てた今も広島や長崎では後遺症におびえています。ベトナムでは若い恋人同士が結婚する時に枯葉剤を浴びたかどうか、深刻な問題になっています。

これほど平和が脅かされているのに、何故、平和運動が燃えないのでしょうか。今の日本の若い人々には確かに楽しいことがいっぱいある。音楽、スポーツ、ファッション、旅行など、それ自体は平和だし、悩んだり苦しんだりしているより、よほど良い。ただ、この平和がいつまで続くのか、いつまで続けさせるのか、を考えてほしいのです。楽しみを否定するのではなく、楽しみの延長線上のものとして平和を思っしてほしいと願っています。

ベトとドクは、「枯葉剤が悪い」「だから平和な世界を」と声高に訴えてはきません。ただ、笑顔だけが私たちの心をとらえて離さない。民俗学の父柳田国男が発掘した大和言葉に咲く顔と書いて「咲顔」というのがあります。

花が咲くような笑い顔を「咲顔」というのでしょうか、ベトとドクの笑顔は、まさにこの咲く顔である。ベトとドクが花を咲かせようとしている。平和の花を。私達はこれに光をあて、水を注がなければなりません。「にんげんをかえせ」と叫ぶ峠三吉の言葉を、この日本で、この人類の上で、再び繰り返してはなりません。

#### 倉田正先生朗読台本

肛門外科医 倉田正 現在 72 歳

私の医師としての第一歩は東京代々木病院です。当時研修医の私は他の外科手術は生意気ながら得意

にこなすことができましたが、痔の手術に関しては不得手でした。なんとかマスターしたく願い、その後新宿の社会保険中央病院で隅越幸男先生という大腸肛門病学の草分けの大家に出会い、それが痔と便秘を私の人生のテーマにしたスタートです。

その後、痔の手術のメッカというイギリスのセント・マークス病院に 3 ヶ月留学、また国内の数多くの有名な院所に足を運び、大学に数年在籍し、三重県津市の生協病院に移り、新しく外科・肛門科を作り上げ、その 10 年後、京都中央病院設立の為、外科医が不在になる京都の吉祥院病院に来てほしいとの当時の前院長橋本先生の薦めで吉祥院病院に着任しました。

こうして京都に住む事になった私の所に、秋の穏やかな日、お近くにお住まいの立命館大学荒木先生、滋賀大学藤本先生が訪ねて来られました。その内容は、ツーズ一病院のフォン博士からの伝言

「ドクちゃんの人工肛門について

1. 日本の援助でドクちゃんの人工肛門を閉じることが可能であるか。
2. それが無理な場合、今の人工肛門のトラブルを少しでも失くせないか。」

というものでした。私は経緯を伺い「人工肛門を作って 5 年経っていますが理論的に人工肛門を自然肛門に戻すのは可能です。しかし、どれだけ直腸機能が残っているのか、その端がどうなっているのか疑問があり、繋ぐことが反って機能的にはマイナスになることもあり、ドクちゃんを診察し、手術した外科医とも会って、その可能性について深めないといとも言えませんし、機能検査を日本でやるとすれば、例えば三重大学でしたら連絡が取れますが、とりあえず誰かが診察に行かなければなりません。」そう言い終わらないうちに「とりあえずベトナムに行き、診察して結論を出してもらえないでしょうか。ちょうど願う会がベトナムから呼んだ通訳のイアン先生が帰国するので、一緒に行ってもらえませんか。」私は、藤本先生の熱い言葉に心打たれ、お断りすることもできず、その 11 月の終わり、保守的で面倒くさがるの私はベトナムに入ることになりました。

ベトナムのホーチミン市に着いたのは夜中、朝 6 時過ぎに大勢の子供達の声で起こされました。ベト

ナム名物自転車の波をくぐり、9時に熱帯の木の花が茂るツーズー病院に行きました。ドクは学校で留守。ベトは静かにベットで休んでいました。その日はベトの診察で終わり、ドクに会ったのはその翌日です。「お尻を見せてくれますか。」ドクは恥ずかしそうに、でも、素直に応じてくれました。肛門に指を入れ、残った腸がどのくらいの長さがあるのか計らなければなりません。本来の肛門はあまり使っていないため細くなっています。人差し指を入れると痛そうなので小指を使いました。

小指に彼の肛門を閉める動きが伝わってきます。直腸に繋ぐためのスペースもありそうです。「何とか繋げるかも知れないが、これは、詳しい検査がいる。」その翌日、私は分離手術を執刀したチャン・ドン・ア博士に、ツーズー病院に来てもらい、手術の様子、解剖学的な事で意見を伺いました。

「確かにあの分離手術は終わっていないのかも知れない。当時7歳の小さな子供の細い腸を何ヶ所か切断した訳で、100名近くで17時間を要した大手術の中で、仙骨を半分に切断しなければならず、大量の出血が予想され、安全に手術を行う為に、人工肛門を付けざるを得なかった。今なら人工肛門を外し、腸を繋ぐ事はできなくはない。しかしその事が、ドクちゃんが発達してゆく保障として、良い結果になるかを予測するには詳しい検査が必要で、その検査は残念な事にベトナムではできないのです。」そこでの結論として日本で検査を受けさせる事になりました。

1994年夏、三重大学付属病院の院長になっておられた小児科トップレベルの鈴木宏志教授が一連の検査を引き受けてくださり、ドクは短期間三重大学に検査入院しました。その結果、「人工肛門を外し残っている直腸と大腸を繋ぐ事は可能である」との嬉しい検査結果であり、検査をして1年後1995年7月19日人工肛門を閉じる手術が三重大学で行われ、人工肛門の所に出ていた腸が外され、お腹に戻されて使っていなかった直腸とつながれました。人工肛門では常にただれが生じ、痛みも伴い、緩めるといつウンコが出るか分からない状況でしたが、自分のコントロールでウンコが出せるようになったのです。

約二ヶ月余りの入院を終え9月6日、ドクは晴れ

てベトナムに帰国しました。これで、一連の分離手術は終わったのだらうと考えています。

また、分離手術と並行して、人権としての見識の高い京都民医連尾崎望医師を筆頭にベトナムでの枯葉剤による障害、その子供の異常に地域でのリハビリを行えるよう現地調査が行われ、それは多くのボランティア医師、理学療法士によるものであり、私の場合も吉祥院病院の多大な協力のもと参加可能となり、現地調査は昨年まで続けられました。

終わりになりますが、皆さんにベト、ドクの分離手術に至った様子をお伝えします。30年もの長期に渡る悲惨な戦争が終結し、当時ベトナムは対外的に解放されておらず、国内ではアジア通貨危機に直面、ベトナムはあらゆる面において疲弊し果てていました。そんな過酷な状況の中、特に戦争中に多くの枯葉剤が散布された地域の一つであるサ・タイ県において1981年2月25日ベトちゃんドクちゃんの子は、腹部が結合し、大腸が一つ、本来4つある腎臓が2つ、膀胱も1つ、性器も1つ、肛門も1つで二人分、一本の健康な足と一本の突出した短い足を持つという状態で生まれてきました。

二人がツーズー病院で養育されていた1986年、ベトは急性脳症を発症、その後遺症で脳性麻痺となりドクの生活を困難なものとしていました。その後二人の分離手術も考えられましたが、死亡率の高いことが懸念され実施されず、1988年ベトが脳症の為、いつ何が起きてもおかしくない状況の中、ドク健康状態も悪化しドクの命さえ危ぶまれるようになり、ベトナムの保健局は各団体から専門家を集め分離手術をする事を決断。1988年10月4日17時間にも及ぶ歴史的な手術ベト・ドク分離手術がツーズー病院にて行われました。

手術に参加した人々は消化器科、泌尿器科、整形外科、神経内科、心臓血管外科、麻酔科、血液学の専門家を含む100名近く。極限の緊張状態の中、17時間に及んだ手術は素晴らしい連携の元、予定通り順調に行われ、ドクの要望に従い、結合双生児だった二人にそれぞれに独立した生活をもたらす事ができました。

ベトナムの人々はベト、ドク分離手術記念式典にて語っています。「このような手術を行うことができ

たのは、グエン・テイ・ゴックフーン医師の積極的な支援要請活動により日本赤十字社やベトちゃんドクちゃんの発達を願う会を通し、日本の皆様から熱心な支援をいただいたからです。分離手術から30年が経過した現在、ドクは成人し結婚して家庭を築き、二児の父親となりツーズー病院平和村で働いています。また、ベトは2006年11月に亡くなりましたが、私たちは手術から得た経験を通して、医療とは一つの専門域であります。この仕事を愛する心が無ければ従事する事が困難な職業であり、私達がベト・ドクの分離手術を行ったのは、決してお金のためでもなければ成果のためでも無く、名誉のためでもありませんでした。国の最高指導者から、メコンデルタの農民達、都市に暮らす高齢者から、自分の僅かな貯金を寄付してくれた子供達まで、全ての人々はその人間性と愛情によってこの手術に参加しました。全てはベト・ドクの命のためだけに手術を行ったのです。

そして成功の為には忍耐と連携、科学的根拠が必要であり、各専門家や医師達は夜を徹して研究し、科学的基礎や世界各国の知識を基に手術の実施計画を立て、利益を求めず事などなく、また、労を惜しまず手術を行い、あらゆる知恵と才能を結集させ、困難且つ複雑な手術を成功させる事ができました。私達は各専門家や医療従事者達と、その経験を共有し連携しなければ到底この手術を成功させる事はできなかったでしょう。

戦争のもたらす悲惨さを理解し、ベト・ドクを援助して下さった日本の皆様に、私達は心からお礼を申し上げたいと思います。そして私達は世界中の全ての人々が、友人となれるよう願って止みません。

最後に私の個人的提案ですが、平和の願いを込めた折鶴、千羽鶴、どうも肛門外科医としては、お尻から背中にかけて針を通すのは、いたって苦痛でありまったくいけません。それでは日本の折り紙、奴さんにしてはどうでしょうか。

こうして、顔の表情を描き、自分なりのメッセージを残す。[具体的に奴さんの大きな折り紙を出す。1つはニコニコ笑った「へいわ、だいすき」1つは涙を流した「絶対戦争はしないで」]

これで、いかがでしょうか。

それでは、終わらせていただきます。

## 宇佐美芳弘先生朗読台本

### ベトちゃんドクちゃんだけでなく

現在ドクさんは37歳。結婚して小学3年生の双子のフジ、サクラとも元気に育っています。今日までに至るドクさんの成長、発達も山あり、谷ありであり、ドクさんが10歳の時は、車椅子と松葉杖の生活でした。

その後、自転車、三輪バイクにも乗れるようになり、生活空間の広がりと共に、トウエンさんという恋人もでき結婚、現在はツーズー病院の職員となり旅行会社のアルバイトをして家庭を支えています。

また、私達は1985年以来、ベト、ドク個人への支援、二人が入院しているツーズー病院への支援、又ベト、ドクだけでなくベトナムに多くいる障害者の支援として、1992年より毎夏「日越友好障害児教育福祉セミナー」を開催してきました。そして、10年に及ぶそのセミナーの発展として1999年10月、ハノイ師範大学の信託による障害児教育指導者養成過程をホーチミン市幼児師範学校の中に開設するという、これまでにない規模の組織的で継続的な事業に取り組みます。視覚障害、聴覚障害、知的障害の3クラスを備えた、

1期2年を想定し、大学レベルの専門教育を実施するという、ベトナムで初めての本格的な教員養成コースでした。この活動に広島から参加した宇佐見芳弘先生は広島県立盲学校を志願退職して、ホーチミン市に一年半に渡って滞在し、視覚障害の授業だけでなく、現地スタッフの一員としてボランティアで関わることになりました。

毎夏のセミナーで体験済みとはいっても、一年を越える長期滞在中での亜熱帯の気候風土は、宇佐見55歳の年齢には確かに厳しいものでした。

エアコンが一般家庭はもちろん、学校などの公共施設にもまだ普及していない時代でしたから、熱塊のような、湿度高く重い空気の中を、喘ぎ泳ぐような日々。でも、その中で人々の暮らしは営まれ、街で障害あるこどもたちや青年たちの、健気に生きる姿に思いがけなく出会うこともしばしばあり、人々の暮らしはとても素朴でつましいものでした。

前期基礎課程での困難は、通訳を育てることでした。また、40人の学生たちの学ぶ意欲を支えたのは、大学や全国の障害児学校を退職された、大勢のシニア講師陣の先生方であり、楽しくおらかな授業と、それぞれの先生方の豊かな個性は、学生たちに障害児教育のあるべき形、姿を印象深く伝えました。

しかし、後期専門課程に入り、日本からの2年次の予算が確定されないようであること、加えて日本からの講師の確保の見とおしが立たない中、この状況乗り越えるべく、奮闘中の藤本文朗先生が病床に倒れ、進む事も退く事もできない半年間もの休止期間を生じてしまいます。宇佐見は眠れない夜を重ねます。

そして、現地スタッフとの議論の結果、現状打開の為、国際的な協力援助を積極的に求めること、またベトナム国内の障害児教育に関わるすべての機関に前向きな協力を呼びかけます。これは次代を担う指導者養成の為の考え抜いた、しかし苦しい認識でした。「学生たちを前にして、どうして途中で投げ出すことができよう」という「意地」が宇佐見を支えます。

やがて、長いトンネルを抜け出て、後期専門課程の開講に漕ぎつけたのは2000年10月でした。それは、学生たちや現地スタッフみんなが心から待ち望んだ再出発でした。学生たちの学ぶ意欲に再び火が点きます。「もう、大丈夫、もう、あとは一直線」。学生たちはそれぞれの専門に分かれて学び、教育実習を重ね、修了論文を書き上げました。

その後、3年の準備期間において、第2期の教員養成課程が、立命館大学を主体に開設されました。さらに2010年代にはいり、ベトナム各地の師範大学に、障害児教育教員養成課程が開設されていきました。第1期、2期の修了生たちは、ホーチミン師範大学の障害児教育課程や各地の師範大学の中心的な存在として活躍しています。

しかし、今もベトナムでは、日本や欧米のように、障害の重い子供を含め全ての障害児が学校に行けることは難しく、1985年よりのベトナムの市場経済導入の結果、教育、福祉、医療へのしわ寄せにより、ドクさんの子供二人分、小学生の教育費は、教科書代などを含む多くの経費が必要となり、その経費は

公務員ドクさんの月給を上回り、夜11時までアルバイトで働かざるを得ない現状であり、多くの子供達が、今なお福祉の恩恵に与えられる状況ではありません。

長い歴史のなかで、ベトナムの市場経済導入は、国にとって二歩前進、一歩後退、多くの国民にとって、一歩前進、二歩後退とも言えるでしょう。人々の真の豊かさとは、教育、福祉、医療の充実と並行する、経済発展の中でしかもたらされないのでしょうか。

ベトちゃんドクちゃんだけでなく、という私たちの心は、これから、何を求め、何を高く掲げていけばいいのでしょうか。

## 付記

昨年10月より始めました当講演、ご来場者の皆様より沢山の暖かい励ましのお言葉（私達が忘れかけていたこのお話しを取り上げて下さった事に感謝し、このお話しが多くの方々に伝わってゆきますことを祈念します。等々）また、狭い会場ながら北海道、九州、和歌山、三重、兵庫、大阪、神奈川、東京等遠方よりも210名ご来場下さり、心より感謝申し上げます。

また、ベト・ドクのお話しは、現在に生きる若い人達にとって、未知の世界であり、少しでも多くの学生さん達にこのお話しを伝え、平和や福祉について考えていただく切っ掛けになりますことを願っております。今後、立命館大学、佛教大学の授業にても若い学生の皆さんに観ていただき、その感想を次回の『創発』にまとめさせていただく予定です。

## 参考文献

- 1) 『がんばれベトちゃんドクちゃん』、ベトちゃんドクちゃんが発達を願う会、かもがわ出版、1986年
- 2) 『ベトちゃんドクちゃんだけでなく』、藤本文朗、文理閣、1997年
- 3) 『ベトとドクと日本の絆』、藤本文朗、桂良太郎、小西由紀、新日本出版社、2010年
- 4) 『ベト・ドクと考える世界平和』、尾崎望・藤本文朗、新日本出版社、2017年



分離手術後のベトちゃん (1993年)



特製車椅子で遊ぶ4才のベトとドク (1985年)



分離手術後のドクちゃん (1993年)



30周年分離手術記念式典 (2018年)



分離手術直前のベトとドク (1987年)



ハノイ師範大学ホーチミン分校 卒業生の今 (2019年)

## Schedule & Performer

2019年10月 (Out-2019)	
26日 (土) pm1:00 ~ / pm5:00 ~ 遠藤久仁子・江指由起代・曾我部勇介・アニー	27日 (日) pm3:00 ~ 遠藤久仁子・塩見順一・溝江拓斗・新井安子
2019年11月 (Nov-2019)	
23日 (土) pm1:00 ~ / pm5:00 ~ 遠藤久仁子・塩見順一・溝江拓斗・大西南美	24日 (日) pm3:00 ~ 遠藤久仁子・江指由起代・曾我部勇介・新井安子
2019年12月 (Dec-2019)	
21日 (土) pm1:00 ~ / pm5:00 ~ 遠藤久仁子・矢木雅人・新納絹子・pm1:00 ~ アニー / pm5:00 ~ 新井安子	22日 (日) pm3:00 ~ 遠藤久仁子・江指由起代・曾我部勇介・西田梓
2020年 1月 (Jan-2020)	
25日 (土) pm1:00 ~ / pm5:00 ~ 遠藤久仁子・塩見順一・大西南美・アニー	26日 (日) pm3:00 ~ 遠藤久仁子・曾我部勇介・矢木雅人・新井安子・新納絹子
2020年 2月 (Feb-2020)	
22日 (土) pm1:00 ~ / pm5:00 ~ 遠藤久仁子・江指由起代・溝江拓斗・新納絹子	23日 (日) pm3:00 ~ 遠藤久仁子・塩見順一・新井安子・西田梓

### 友情出演

12月21日 (土) ヴァイオリン演奏: 小西淳子 / 12月22日 (日) ハーモニカ演奏: 下橋邦彦  
1月26日 (日) ギター演奏: 寺本尚宏

### 一配役一

藤本文朗 役: 遠藤久仁子  
河原正実 役: 曾我部勇介・新納絹子・溝江拓斗・西田梓・アニー  
倉田正 役: 塩見順一・江指由起代・矢木雅人  
詩朗読: 大西南美・新納絹子・西田梓・アニー・新井安子  
そしてベトちゃんドクちゃんだけでなく、遠藤久仁子・新井安子・田中薫

挿入歌  
ベトナム NDC 盲学校製作  
生徒達の自作の歌声  
アルバム「渴望」より

## Performer



Staff 演出・脚色: 遠藤久仁子 照明: 片浦正和、遠藤博圭 上映スタッフ: 遠藤博圭 舞台監督: 劇団員各人  
他/スタッフ: 坪山正文、中武題、佐々木思郎、アンディ菅野